徳島大学入試結果 50 年を振り返る

植野美彦[1)]，槌谷和也[2)]，上岡麻衣子[1)]，関 陽介[1)]
徳島大学高等教育研究センター[1)]，徳島大学学務部入試課[2)]

１．振り返りの目的

18 歳人口の減少下においても，大学進学率が近年まで一貫して上昇したためか大学進学者数は増加傾向にあった。しかし，2018 年以降は 18 歳人口が 120 万人を下回り，大学進学率の上昇があったとしても大学進学者数は減少局面に入った。2025 年度入試から新課程入試へ移行するが，このことが先に述べた市場環境を踏まえ，どこまで本学の志願者数へ影響を与えるか未知数である。我が国全体の方向性とは言え，受験生は自分にとって最も有利な環境で受験に臨む存在であることから，大学の思惑通りに志願者が集まるとは言えないだろう。そこで，徳島大学入試結果 50 年を振り返ることで，入試制度等の変遷がどのように志願者数に影響を与えたか分析を試みることにした。

２　入試結果 50 年分析

徳島大学総志願者数過去 50 年を図 1 に示した。本来ならば入試区分単位による志願倍率や入学定員の増減なども含めた分析を行うことが適切であるが，入試制度等の変遷が全体の志願者数にどのように影響したかを分析するため総志願者数のみに焦点を絞る。参考として県内生，県外生の志願者の動きもグラフで示す。

1973 年から 1978 年を確認すると志願者数は堅調に推移している。1949 年から 1978 年までは国立大学において 1 期，2 期に分かれて個別試験を実施していた時期にあたる（徳島大学は 1 期校）。1977 年は志願者増が見られるが，これは歯学部歯学科，教育学部養護教諭養成課程が設置された年であり，入学定員が 835 名から 935 名となったことの影響である。

しかし，1979 年から 1986 年の間は志願者数が大きく低迷している時期となる。これは国公立大学の共通 1 次試験が 1979 年から開始されるとともに，国立大学の受験機会が 1986 年まで 1 校しか受験ができなかったことによる影響が大きい。入試制度の変革が大学志願者数に大きく影響するという最たる事例である。なお，1986 年は総合科学部設置によって入学定員が 945 名から 985 名となった。新設学部のため，当時の入試制度の枠組みとは別に個別試験を実施したことで志願者数が増加といった特殊なケースであるため注意が必要である。

1987 年からは志願者数は大きく改善している。これは国立大学が A，B 両グループに分かれて個別の 2 次試験を実施する「連続方式」を開始したことによる影響が大きい（なお，国立大学は 1989 年から「連続方式」と併用で現行の「分離・分割方式」が導入され，1997 年から「分離・分割方式」に 1 本化）。いわゆる複数回受験が可能となり，その関係で改善に繋がった。ただ当時の入試課職員はこの急激な志願者数の増加にどのように対処したか気になるところである。1987 年から約 3 年間において志願者数は比較的落ち着くが，1990 年は志願者数が大きく後退している。1990 年は共通 1 次試験に代わって大学入試センター試験が開始された年であり，大学入試センター試験は私立大学も利用が可能となり，国公立大学は教科・科目数の自由選択が可能な制度へ移行した。このことにより本学の志願者数への影響も少なからずあったことが予想される。

1992 年から 2015 年の間は志願者数がおよそ 5000 人～7000 人の間で推移している。1992 年は我が国で 18 歳人口がピークとなった年である。それ以降は大学進学率が上昇傾向となったこと，入試制度も推薦・AO 入試の拡充などにより，多少の増減はあるものの比較的志願者数が安定してきたことが窺えよう。なお，2002 年は大きく

志願者数を伸ばしているがこれは医学部保健学科の設置によるものである。

2016 年は志願者数 5000 人を割り込むことになった。この年は常三島地区で新設・改組を行った年であるが特定学部の志願者数の伸び悩みによる影響である（募集方法の改善などによりそれ以降はやや回復傾向にある）。また，図 1 からも明らかなように徳島県内の志願者数が 2014 年以降においては減少傾向である。徳島県内の少子化の影響が大きく，徳島県内を含め全国的にも人口減の波がこれから押し寄せることになる。

３　結び

志願者数は教育改革による波及効果によって増減に影響を及ぼすことは過去 50 年の振り返りからも明らかである。一方，共通 1 次試験の実施や大学入試センター試験の導入など大きな入試制度改革によって本学志願者数へ大きな影響をもたらしていることも事実である。

2025 年度入試から大学入学共通テストで「情報Ｉ」が導入される。このことは受験生にとっては進路選択に大きな影響を及ぼすことはほぼ間違いない。これからの改革は，過去の入試制度改革の背景事情とは大きく異なることに注意しなければならない。定員割れの大学が今後さらに増加し，入学者選抜の理念を先行させることでさえ難しい時代に突入する。アドミッション・ポリシーに合致した入学志願者を安定的に獲得するためにも，安直な発想で入試制度を検討することは過去の教訓からもよく学んでおく必要がある。

参考文献

(1) 徳島大学（1975～2010）．入学試験に関する調査
(2) 徳島大学（2011～2013）．入学者選抜研究専門委員会報告書【非公開】
(3) 徳島大学（2014）．徳島大学アドミッションセンター報告書【非公開】
(4) 徳島大学（2015～2019）．徳島大学総合教育センターアドミッション報告書【非公開】
(5) 徳島大学（2020～2023）．徳島大学高等教育研究センターアドミッション報告書【非公開】

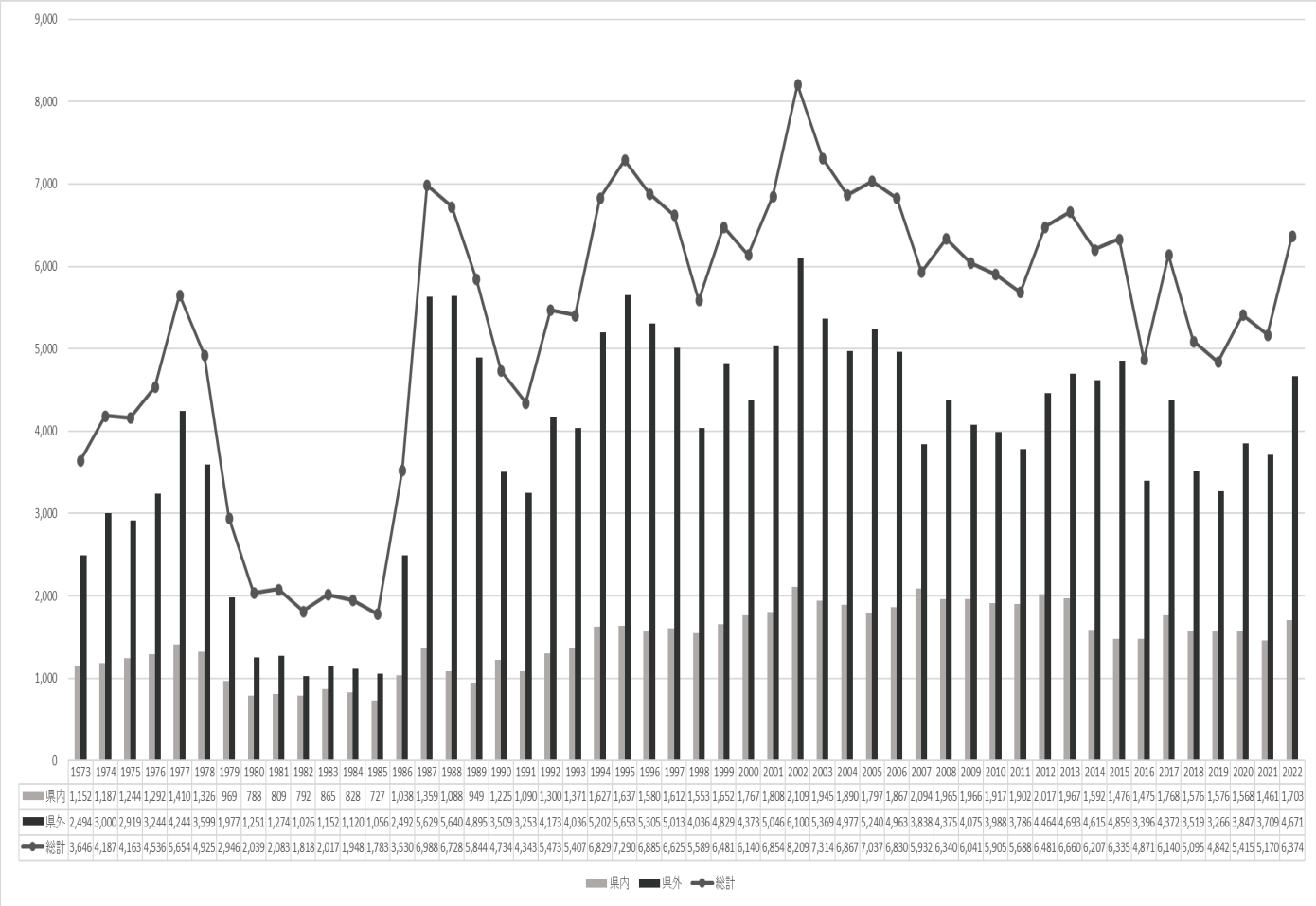

図１　徳島大学総志願者数　過去５０年（西暦は入試年度を示す）